

智慧・慈悲のはたらき そのものが

「仏」なのです

坂東 性純(ばんどう しょうじゅん)

「仏さま……」。

私たちは一人居て、だれ言うとなくつぶやいています。おのずと頭が下がってまいります……。

まことに悠久ゆうきゅうの歴史の中で、「仏さま」ということは人間の思いに先立って、ずつとはたらき続けてまいりました。仏さまはことばとなつて、人間の思いを超えて、はたらきかけてくださっていたのです。人はそこに言いしれぬ安らぎを感じてまいりました。仏さまということばに言い尽くせない信頼を感じていたからであります。

仏さまは人間の不信一杯の心にはたらきかけ、かたくなさをやぶり、信頼の領域を拓ひらいてくださっています。そこに、人は限りない「まこと」(智慧ちえ)に気づき、奥深い「いつくしみ」(慈悲)を感じ取るのであります。

おそらく、気づきを感じ取るものを、ずつと無意識の奥底に抱いていたからであります。ふとしたことで気づかされるのです。

「あつ、あなたは私が思う以上にずつと私のことを考えてくださっていたのですね」。このように確かな智慧と見捨てぬ慈悲を人生のただ中に感じる時、人は、いかなる境遇であれ、いかにつまずいていきた道のりであれ、人生の絶望しないのであります。

す。

「ああ、ここを生きていけばいいのだ。いかようであれこの私から再度歩みを始めよう。」

呼びかけの中に歩みが始まります。

仏さまのおことばは、彼方からの喚び声であり、限りなく深く広い世界からの呼びかけであります。そのために、このちっぽけな私の頭には入ってまいりません。むしろ、こちら側から押し量つてわかるというよりも、呼びかけられてはじめて気づかされてくるものであります。

人のことばをおとしてであれ、風に揺らぐこずえのささやきにであれ、いまだかつてない声を聞くのであります。

まことなるもの、リアルなるものは彼方からの呼びかけの中に知らされてまいります。

「あつ、この私が呼びかけられている」。

これは孤独なる私にとってはまさに感動であり、かつてないリアルな経験であります。では、呼び声に出遇う時、み声の奥にあるお心は一体いかなるお心なのでしようか。

『仏説観無量寿経』ではお釈迦さまは、「仏心というは大慈悲これなり」（真宗聖

典一〇六頁）とご説法くださっています。振り返ってみますと、私たちは何かを探し

続けてずっと今日まで生きていきました。一体何を探してきたのでしょうか。わか

らないのです。

ところが仏法をいただいてまいりますと、久遠くおんの昔から探し求めていたのは、実は
仏さまのお心であり、さらに言えば仏さまの大慈悲であったことが知らされてくる
のです。いかなる境遇に生きる者であれ、いかなる振る舞いの者であれ、見捨てず平
等に受けとめて、生きるべき道のあることを指し示してくださっているお心でありま
す。

そのお心こそが、私たちがかねてより探し求めてきたもの、智慧と慈悲のはたらき
そのもの、つまり仏さまなのです。

大江 憲成

(一九四四年生まれ。九州大谷短期大学名誉学長。日豊教区観定寺住職。)

「法語カレンダー随想集 今日のごとば二〇二〇」(東本願寺出版)より

七十八頁、八十一頁